

病災要録：附録

雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 5 0
ページ	[附] 1 - [附] 1 5
発行年	1913-06-15
URL	http://hdl.handle.net/2298/6235

附 錄

病 災 要 錄

一 病氣發生の前後

傳染病の猖獗、惡疫の流行は敢て珍らしからざれども、文明的設備を有する校舎と、進歩的知識を有する人物と、しかも専門的學才ある校醫とを具へ乍ら、遂に今回の如き慘事を惹起したるは、實に堂々たる吾が龍南の不祥事とも云ふべきか。然し乍ら、如何に病菌が當事者の不注意より傳播したりとするも、一般に病魔は半ば偶發的なるを免れざる上に、熊本の地は殊に腸チフス流行地なるを以て、這次の禍變は一面よりは天災なりと目する外なし。

通常此の二月前後は、氣候激變の時にして、動もすれば皆誰も微恙を感じるの傾向あるものなるが、去る二月末に至りて、習學寮内に數名の病臥者を生じたるも、左したる事はなかるべしと思ひゐたるに、その稍増加の傾向あり、後には緩熱を感じて、臥床するもの頻々續發するより、漸く校内一般の警戒を喚起するに至れり、

然るに二月末に至り、中數名は突然症狀危險なること診斷せらるゝや、學校にては各専門醫家の意見を徵して、先年惡疫發生當時の例に倣ひて、俄かに二月廿七日より三月二日に亘りて四日間の臨時休業を宣し、その間に於て、罹病者の所置と校内の消毒とを行ひ、習學寮を閉鎖して、寮生は一々健康診斷の上外泊せし

め、以て今後病菌の傳播を防壓せんと試みたり。此の前後の方策に關しては、舎監及寮生間に多少の紛擾を惹起し、二三の異論を生じたれども、大體に於て當事者の行動は機宜を誤らざりしを信するものなり。

然れども時や既に遅し。病菌は其の潜伏期間を利用して、已に生徒間に蔓延し居り、時恰も試験前にて疲弊衰弱せる學生の體軀は、剩に病毒に對する抵抗力を失ひ居たりしたため、四日間の開校と消毒とは何等の効なく、罹病者は益々増加し、欠席者相次ぐの状況となり、各人は皆神經過敏に陥りて、殆んど頭痛微熱を感ぜざる者なきに至り、全く學事さへ手に就かずして、生徒間は病氣の噂にて持ち切りの有様となれり。

一方罹病者の症狀は益々險惡となり、患者は増加して病院の隔離室も満員の狀態を呈し、若し今後此の儘にして一層患者増加するにも至らば、收容する病室の餘地なきため、如何なる窮境を呈するか實に危虞に堪へざることとなり、また此の際授業の繼續は却つて毒菌猖獗の機會を與ふるに過ぎざる事となりたるを以て、學校當事者側にも、根本的撲滅策を採ることに一致し、此の期に臨んで寧ろ長期の休業をなして、完全なる消毒を行ふと共に、生徒を歸郷せしめて、十分静養の餘地を與ふるを得策とするといふ意見出でたるが、生徒側にありても愛校の念と病友に對する至情とよりして、期せずして三月七日瑞邦館に於て大會を開き、今後の所置に就て協議するところあり、結局、長期休業、試験延期の決議をなして、之を校長の膝下に呈し、その肯諾を仰がん事に一致したるを以て、委員數名を選んで、直ちにこの報を校長に致したるに、校長に於ては已に此の間の方策に關しては十分決せられたる所あり、折柄開催中の職員會議に諮られたるに、その方針に於ては一致する所あれども、生徒の提議を其の儘容るゝは如何ならんとの意見出でたるも、竟に區々たる小感情を捨て、生徒の提案に聽き以て根本策を採るに決着し、此に學校にては嚴密なる生徒の健康診斷

を行ひたゆみ、三月十日より四月八日に至る約四週間の休暇を與へて、各生徒をして十分静養せしむることなせり。

二 校舎閉鎖中の狀況

五高チブス發生、病毒蔓延の報一度世間に傳はるや、校外の同情は翕然として罹病者の身上に集り、あたゝ國家有爲の青年をして、一朝半途にして彼が青雲の志を滅却し去らしむるは、社會の一大損失なりとの情を以て、厚意と盡力とは社會の各方面より與へられ、特に熊本縣立病院にては、破格の厚意を以て院長初め醫員看護婦に至る迄、初發以來非常なる盡力を受けたり。今初發以來三月末迄チブスと決定せし患者の總數三十名の姓名を掲ぐれば左の如し

田中 盛技	山田 信一	安居院 經市	野守 繁人	天春 昌次	田中 弘吉
木下 郁	高 島 勇	坂内 正行	高木 貞治	津田 千代吉	岡添 柳吉
生野 馨	澤田 武雄	石川 鶴次	飯田 六造	村上 槌夫	中 島 實

(熊本縣立病院)

大磯 義士

(熊本市傳染病院)

谷口 長一郎

(八代町傳染病院)

三 澤 浩

(御船町傳染病院)

齊藤 勝敏

(福岡大學醫院)

根岸 英介

樋口 甲一

山川 廉 本田 保 秋永 富太郎 渡邊 憲三 (以上自宅)

右の中死亡者に關しては別項掲ぐる所に就て見られたし。却説、發病の兆候あるに際し、學校當事者の豫防策が時機を失したるは、實に遺憾の至なれども、病氣蔓延後に至り、全力を盡して恢復に努められたる敎授職員諸卿の活動は、洵に吾人衷心の感謝に値するものあり。先づ習學寮閉鎖後は一大英斷を以て、各所各室の大消毒は勿論、數十名の人夫を備ひて疊の燒棄、不潔場所の改造等、著々として實行せられ、殆んど一見叮嚀過ぎる程の細心を以て、事後の改善を圖り、また各父兄に通知を發して、生徒間の新患者の有無を質し、常に適宜の連絡を計りて、萬遺漏なきを期し、入院患者に對しては岡村敎授病院内に宿泊起臥して治療に關する一切の庶務に従事せられて、殆んど日夜を分たず粉骨碎身師弟の情誼を體現せられ、また校長評議員生徒監諸君等は毎日交番に、擔任敎授は各擔任生徒を訪問して、病者の慰問に盡され、親しく病床に接して萬般の世話に従事せられたるは、實に近代敎育界の美事として世に誇ると共に、今更師恩の厚きに泣かざるを得ず。

而して入院者中萬一不幸にして、病魔に倒るゝ者を生ずれば、葬骸慰靈の方法一として盡されざるなく、遺族の訪問、追悼會の執行、遺骨の見送等敎授諸氏衷心の涙を以て活動せられ、又在熊生徒側にありても、病友の慰問はもとより、弔問會葬等學校側と相一致して各々勉むる所ありたり。此に於て、さしも暴勢を振ひし病毒も、爾後些も増大することなく、患者も死者十名を除いては漸次輕快に赴き、校内外の誠意ある努力と同情とは、遂に希望の曙光を認めて稍々安心する迄になれり。よりて所定の如く四月八日よりは愈々開校の運となりたるが、學校にては更に注意の上に注意を加へて、一應昇校生徒健康診斷を行ひ、併せて衛生

講話會を開いて、各自の警戒を求め、今後の傳染を豫防することゝなれり。

かくて四月十四日には、犠牲者十名のために、遺族を招待して、武夫原頭に追悼祭を執行し、亡者の靈を慰め、此にチブス事件は全く一段落を了れり。

三 衛生講話會

四月十二日濟美館に教員生徒舉つて集る。松浦校長先づ登壇し給うて曰く

今回は圖らずも病菌同胞の間に感染して遂に多數の患者を出すことゝなり且數名の死亡者を出せることは無上の遺憾にして更に言ふべき言辭を知らず。内外に對して誠に申譯なき次第にして我等は日夜心痛し只管恐懼謹慎して首を垂れて目下罪を待ちつゝあり。即ち余は一方に於ては罪を待ちつゝ一方に於ては喪中に在るなり。只諸君が休暇中幸に無恙にして茲に諸君と相會するを得し事が余に取りては唯一の慰安たり。諸君は此上十分に攝生の方法を守りて各種の病に罹る事なく健全に修學を續けられんことを祈るのみ。吳々も各自自重自愛せられんことを懇望するのみ。今度の出來事に就いて校の内外共に非常の同情を寄せ給へるは如何にも禮辭なき次第なり。最初發病の際諸君の中には當局者の手緩きを憾む形跡なきにしもあらざりき。然れども病名の定まるや否や我等と相呼應して患者と其父兄親戚とに對し全力を盡されたるは感謝に堪へず。凡そ火災若くは傳染病發生の際などには諷言流説行はれ易きに係はらず諸君は専ら患者に意を注ぎ、しかのみならず「かゝる際には斷乎として流言を防止せざるべからず」との大覺悟をなして遂に微動だも起さしめざりしことは其の苦心察するに余りあり。諸君が同情愛校の美、此の厚き精神は決して一朝一夕の故にあらず。

平素の修養の致す所ぞと竊に感涙を禁じ敢へざりき。此の精神は臆て學校を守り國家を守り人道を堅持すべき精神の一端の發現に他ならずと思へば實に溢るるばかりの感謝を表せざるを得ず。余は如何なる境遇、如何場所にありととも心肝に銘して寸時も忘れざらんとす。縣立病院は當時病室塞がりしに係はばらず多數の我が同胞を收容して爾來今日まで院長初め事務員看護婦受付小使に至るまで非常の同情を以て治療と慰安とを與へつゝあり。かゝる大同情は本病院ありて以來初めてなりと洩れ聞けり。市立傳染病院、縣廳、市役所、市内の醫院、各新聞社、陸軍の方にも御世話を願ひ、濟々疊及び熊中よりも厚配を蒙れり。其他熊本の一般の方々よりして意外の同情と注意とを辱うし今日猶煩はしつゝあり。縣外に於ても福岡大學病院を初めとして患者の居所何處にも努力を仰げることは夙に諸君の知れる所なるべし。此の内外の同情と盡力とに對しては我々は何を以て之に報ゆべきかを知らざる程なり。我々全校の者は之を永久に傳へて第五高等學校の在らん限は感謝の念を保留したく思ふなり。終りに臨み繰返し諸君に祈る、自重自愛十分に攝生に注意せられんことを。次で由比教授登壇、大要左の如く述べらる。

余は校長の命により、暫時間、具體的の事柄を告げ併せて將來の要求を提出せんとす。抑々這般の事は本校開設以來未曾有の變事にして余も諸君も全く經驗のなき所なるべし。二月二十日を中心として我校に約十名の熱性患者を生ぜり。其原因は文部省より派遣の古瀬氏以下皆調査せしも不明なり。患者の大部分は縣病院に收容せられ、初めはバラチアスにならんと疑ありしものが漸次真正と決定し二月下旬より三月上旬にかけて病勢益々猖獗、傳染病規定の取扱を受くる者卅二名に及び其他熱性患者數名ありき。病室を視巡るに恰も野戰病院に於けるが如く實に悽慘の念に驅られたり。且つや惡性にして同胞の生命を奪ひ去りし事今日ま

でに九。然るに茲に開校の手續を経るを得しは不幸中の幸なり。残る廿三名の患者は一般に經過良好なるが猶重態に陥れる者一名、稍重くして時を要する者一名あり。患者を治することは醫師の力なれども側面よりして慰問し、相談に預り又は不幸者の所置、親族への慰安等に就いては能ふ限り微力を盡せり。各方面へ對しての感謝も校長の述べられし通しなり。校内の消毒は古瀬醫學士其他の指導に従ひ御覽の通にせるが習學寮は殊に入念改修中なれば當分閉鎖は己むを得ざる事と思ふ。從來事の重大に至らざるを期せりしに我等の腦力乏しく醫者との連絡十分ならず學校行政上の施設不適切にして爲めに斯の如きに至らしめしにはあらざるかと恐懼に堪へず。誠に國家に對し校長に對し同寮に對し諸君に對し相濟まざる次第なり。今一例を引かむに、戰爭に於て或隊が大損害を蒙れりと假定せよ。其隊長の心中果して如何。乃木軍司令官の上奏文を讀んで暗涙滂沱たらずんばあらず。神田の大火災は火元救世軍なりしかば山室軍平氏は告白書を出しき。余此例に當るとは云はざるも余一個人にとりて預れる九人の屍を其父兄に返すは恰も自ら刃を加へたる如き悲痛の感あり。否個人としてののみならず學校として以上の感を述ぶる必要ありと思惟す。かゝる際には間接直接種々の問題の起るは止むを得ざることなるが所詮諸君と共に精神上身体上健全なるを期するにあり。是れより衛生講話あればかの陸軍にて調査せる熊本市内傳染病分布地圖をも參考として謹聽せられんことを望む若し夫れ友人の病氣を聞かば至急報せられたし。開校の上は休暇中の關損を償ふに足る底の十分の勉強を要求す。進級に關しては當方にも注意に注意をなし可及的便宜を計るべし。余も若し幸にして依舊本校教育に従事するを得ば如何なりともして此の重大なる罪過の一部なりとも償はんと志せり云々。

柿田校醫由比教頭に代つて立たる、

昨年十月バラチブス患者數名を出し今度又た眞正窒扶斯の侵入を受けたるは衛生上の注意の缺陷にして余の直接に慙愧し恐懼して措く能はざるところなり。されど繰言は無用なれば今後の警戒を周到にせん。

一 腸窒扶斯流行と諸多の關係

- a 季候 二月と四月が多し今度のは破格なり
- b 年齢、性、體質 十五乃至廿五の者最も罹り易し、最も少きは一年以内の小兒と老人となり。女子よりも男子に患者多し。弱き人よりも強き人却つて罹る。

- c 土地 濕地に多し。

- d チブス菌の抵抗力及其運命 体内に入れるものは容易に死せず。日光には脆きが寒氣には頗る堪へ氷結すとも死せず。

- e 患者發生の狀況(爆發的と連鎖的) 今度のは爆發的。

二 疫學上傳染力を有する者

- a 腸チブス患者

- b 臨床上チブスと認められざる者(不全チブス一名逍遙チブス)

- c 肺炎腦膜炎のチブス菌に因するもの

- d 永久排泄者

- e 細菌攜帶者 婦人及老人に多し。菌は膽囊内に存在する故除くこと頗る困難なるが豫防上研究中なり、

三 豫防法

- イ 公衆的 上下水道完全なる所にも前記の永久排泄者細菌攜帶者あれば警察力及ばず。
- ロ 個人的附豫防注射法 菌は消化液の爲死するを以て胃の働きをよくするに如くはなし。免疫に先天と後天とあり、先

天は自動的にして後天は他動的即ち注射法なり。生物を食はざるは無論豫防の一つなり。

(四) 清潔法 食卓に着く前一度手を洗ふを安全とす

五 消毒法 便所消毒最も必要。傳染源(正源と副源)

げにや内心憂ふる所あるものゝ如く音吐透徹せざることもありて床しかりき。

最後に谷口醫學博士悠容逼らす間々諧謔を交へて頗る趣味ある通俗的講話あり

今回患者の大多數は我が縣病院に引受くることとなり一人も死亡者ならしめんと期待せしに不幸にして全數十九名中四名の死者を出せり昔時は百人に付四十乃至三十の死者を見たるが近來は六プロ乃至十四プロを超はずとの定則となれり余は十數年間此病院を預り多少の經驗ありと自信し亦實際具丈けの死亡者を出さざりしに今度圖らずも二十一プロセントの死を來せしは誠に赧顏の至なり。然れどもそれにはそれゝ理由あり。一人は當初より危險なりき。嘗て脚氣に罹り剩へ苦學生にして勉強の度過ぎたりと見ね心臟著しく弱り居たり。故に腸出血あり。食鹽水の注射を反覆し晝夜を間はす二時間毎に數日間藥を注射し醫員も看護婦も寝ねざる程に力めしも心臟麻痺にて遂に倒れたり。今一人は個人としての關係もあり平素體質弱きを以て當地に遊學以來余自ら一ヶ月に三度位は檢査し三年間の修學に堪ふるや否やを憂慮せり。高熱四十一度余に至り果して心臟内膜炎を起し微菌心臟に繁殖し體內一般に廣がり。かくて髄質上詮方なかりき。最後の二人は無難に經過しつつありしに三週間目の半頃に多量の腸出血あり出血すれば衰弱して死することもあるがこれは血液中の病毒を撲滅する抗毒素と稱するもの血と共に失するが故に初めより更に病に罹り直せると同結果となる。即ち抗毒素欠乏して傳染毒の爲に死なれたるなり。他は大率ね良好なり。一人併發症ありしも既に癒れたれば不日輕快に赴くならむ

病氣は天災と云へばそれ迄なれど具眼者より見れば然らず。例へば狂犬に咬まれたるは天災かも知れざれども豫防注射を實行せずして死せる時豈天災と云ふべけんや。チブスの徑路は容易に判知し得られず。豫防は畢竟攝生にあり。チブスは四百四病のイの一番にありて消化機系統の代表者なればチブスに對する用心をなせば四百四病の半ばは防がる。かの亡國の病たる結核すらチブスの豫防法にて其一部を防ぎ得べし。何となれば結核は空氣傳染の外消化機より來ることも往々なればなり。清潔法は最も肝要なり。水には殺菌力は無けれど稀薄にする力あれば従つて傳染力も減する理なり云々

それより万年床寮雨、ストームの害を諷し去り諷し來りて「明治時代の書生風をば一掃して大正の青年氣質を發揮せざるべからず」と結ばれ態度流石に博士の實目ありけり。(江楠筆記)

四 追 悼 祭

今年はいかなるまが年にかありけむ。まだ諒闇中だにあるを、今又この思出多き追悼の祭をさへさへぬることの悲しさよ。思へば三月の半頃より惡しき病に冒されて、打臥しぬる同じ學の友どもの、一人たふれ二人たふれ四月の初頃となりては九人といふ多き數とはなりぬ。そが間學舎は休となり、九人の親達は更なり師の君達さては病院の醫師たちまで、あらん限りの力を盡させ玉ひつれど、遂にかなはざりしこそかへすべくもくやしきことの極みなれ。病もいつしかをさまりぬれば四月十四日といふに故大磯義士、山川廉、高島勇、樋口申一、生野馨、澤田武雄、石川鶴治、本田保、渡邊憲三の九君のために嚴かなる追悼祭を行はれたり。先づ登場のさまをいはんに、武夫原の中程より少し北に當りて廣き地所を限り、よく秣ひ清めて四方に柱を

立て幕もてかこひ、北に祭壇をしつらひ五色の幕をひきめぐらして正面を高くくくりあげたり。東を齋員、來賓の席とし、西を奏樂者、遺族職員の席とし、南を生徒の席とし入口も茲に設く。この入口より祭壇に向けて眞一文字に薙道をしき、なほ祭壇の東に隣りて供物の置所を作りぞの前には齋員の通路として又薙道をしきたり。この日は空うちくもりて日影も見えず龍田嵐ふきたるして雨にもならむさなりければ、祭場の中央だけをわきて其外はすべて上にも幕をうちかはたり。午前八時頃になり第一號鐘にて職員生徒一同着席し、第二號鐘にて遺族來賓着席し第三號鐘にて齋員一同着席しけるが遺族の人たちの顔うなだれてしづくと入り來れるを見てはそぶろに涙を催されぬ。先づ祓主祓の詞を奏す、此時一同起立。次に大麻司の大麻行事。次に鹽水師の鹽水行事。いづれも嚴に神々しく心の底までしみ渡るを覺ぬ。次に齋主の招神行事（警蹕二名之に従ふ）、此時一同起立、此間奏樂。呼出しの大鼓の音につれて、諸聲にふき合せたる物の音とも、なき魂をも呼びいでつべう悲しきに、遺族の人々のねたで顔うちたはひたる、さこそと哀なり。次に神饌司以下獻供を傳供す、此時奏樂。次に齋主（竹下眞美氏）つくしみかしこみ祝詞を奏す、此時一同起立。

追悼祭詞

大君の御楯とならん。益良雄の。赤き心を筑紫がた。肥の道のしり。熊本の縣。流も清き白川の。いつみを汲みて。黒髪の底津岩根に。高臺を太敷たてし。これの第五高等學校はしも。明治のはじめに。創設ありて。多くの學生を。教養せられ。政治に教育にはた實業に。あまたの俊才英士。彬々として輩出し我國人材の富源とも謂ふべきを。今茲は。いかなる禍神の御あらひぞや。腸膺扶斯となんいふ惡しき病の爲めに。身なやみまして。學びのわざもねせざる。學生あまたいでまたるより。職員のうちしたちを

始め。生徒同僚の人々は。身も棚しらに。看護につとめ。醫藥を撰み。夜晝わかずひたぶるに心を竭されしも其効なく。あまたあねなくなりませるは。いかに哀しく。いかにくやしきことの極みならずや。郷里にいます。うからやからの人等は。寒きにつけ暑きにつけ。夜となく晝となく想ひをはせて。いつかくゝと其卒業を待詫び玉ひしに。計らずも今この禍事たこりて。多くなき人の數に入り玉へるは。いかに悔しくやたはしけん。いかばかり痛ましくやましつらん。哀れ大礪義士君石川鶴治君本田保君渡邊憲三君高島勇君澤田武雄君生野馨君樋口甲一君山川康君。九人の神靈よ。今汝命達の御靈を。此齋場にませまつり招き奉りて。加藤神社社司竹下眞美。嚴弟の中取持て告げ曰さく。哀れ汝命達は。郷國の中學より拔んで。これの高等學校に入り。たのもく有爲の才を抱き。國家の柱石を期し。朝には阿蘇の煙を仰ぎ。夕はしら川の水に臨み。行くものは斯の如しと晝夜を捨てず。學術の研鑽に、日夜怠らず。勉め勵まれつゝありしに。いかなれば。禍津日は。このあたから青年有爲の人を奪ふて。幽府にたくりしか。そも禍津日の神のすさびこそ。いかにもせんすべなけれ。哀れ悔しきかな。あはれ悲しきかな。故れこゝをもて本校々長をはじめ。職員生徒等は夙に諸君の幽魂を安んじます。また遺族たちの心を慰さめんとて。種々相議りて遠く在郷の人々を迎へ。齋場にうち集ひて、靈祭仕へまつらんとして。備へ奉るものは。神酒神饌饗餅を始め。海川野山のくさぐさのたなつものを。横山の如く置足はしてたのもく玉串のとりくゝに。慕ひまつり拜みまつらくを。あな哀れと聞食して慰み玉ひ樂しみ玉へ。そもく御靈祭の典式は。中つ御世より佛の道によりてのみ行はれしを。明治の大御世よりは。古への直く正しき大御手ぶりに改め玉ひし。畏き大朝廷の御掟にならひまつりて。今回本校職員生徒もろく相かたらひ

て。今斯く吾國固有の式典によりて。御靈祭つかへまつらるゝ事を。天翔り空翔り見そなはして。我大皇國の道のいやますゝに。ひらけ行かんことは更にもあはず。吾第五高等學校の教の道の。彌々天の下に立榮わんことを。守り玉ひ幸ひ玉へと。打鳴す鼓の音。吹ならす笛の聲の悲しきにそへて。かなしみいたみ。深く厚く誅言聞えまつらくとまをす。

大正二年四月十四日

加藤神社社司

竹下眞美

と嚴に讀み了るや祭主〔松浦校長〕祭文を奉讀す、此時一同起立。只さへ細りかにいます校長の此のほごりの上御心づかひに、ひとしほ面やせ玉ひぬるが、しつゝと祭壇にすゝませ玉ふを見ては、み心の切なさ思ひやられて、思はず涙に咽ばれぬ。あはれ遺族の人たちはじめこをいかに見玉ひけん。聲もふるひて讀出で玉はく。

維レ大正二年四月十四日第五高等學校龍南會員一同謹ミテ清酌庶羞ノ奠ヲ以テ故大磯義士君故山川廉君故高島勇君故樋口甲一君故生野馨君故澤田武雄君故石川鶴治君故本田保君故渡邊憲三君ノ靈ヲ祭ル諸君ノ我等ノ學校ニ在ルヤ且暮學ヲ勉メ行ヲ修メ師ヲ敬ヒ友ヲ愛シ能ク學生ノ本分ヲ盡シテ敢テ懈ルコトナカリキ我等ハ諸君ガ他日必ズ大成スベキコトヲ信ジテ以テ無上ノ樂トナシタリキ然ルニ圖ラザリキ惡疫我等同胞ノ間ニ感染シ諸君亦此不慮ノ禍ニ罹ラントハ爾來諸君ハ父兄親戚ノ深切ナル侍養ト醫師看護者ノ熱心ナル診療トノ裡ニ只管疾ヲ除カンコトヲ期シ我等亦微力ヲ竭シテ日夜諸君ノ平癒ヲ祈リシモ不幸ニシテ天諸君ニ假ヌ壽ヲ以テセス藥石効ナク諸君終ニ逝キテ復還ラス嗚呼哀哉人生古ヨリ死アラサルハナシ然レトモ前途猶春秋ニ富ミ將來大ニ爲スアルノ資ヲ以テ一朝ニ暨ノ爲メニ夭折スルハ洵ニ人生ノ

恨事ニシテ我等ノ痛嘆措ク能ハサル所ナリ余ヤ我等ハ諸君ト幽明其界ヲ異ニスルモ靈魂若シ滅スルコトナクンバ我等ハ必ス當來ノ世ニ於テ諸君ト師弟タリ朋友タルコト復昔日ノ如クナランコトヲ希フモノナリ伏シテ已往ヲ回顧スレバ諸君ノ風丰聲音髣髴トシテ耳目ノ間ニアリ彼ヲ思ヒ是ヲ念ヘバ悲緒轉タ促リ傷心更ニ切ニシテ又言フ所ヲ知ラヌ嗚呼哀イ哉茲ニ我等一同滿腔ノ熱誠ヲ捧ケテ諸君ノ靈ヲ祭ル諸君在天ノ靈冀クハ來リ享ケテ

第五高等學校

龍南會長 松 浦 寅 三 郎

次に職員惣代（杉山教授）祭文を奉讀す、此時職員一同起立。次に生徒惣代（大津留耕吾君）祭文を奉讀す、此時生徒一同起立。次に寮生惣代（藤岡万五郎君）祭文を奉讀す、此時寮生一同起立。次に來賓惣代（高工小松清次君）祭文を奉讀す。いづれもいとづばらかにねもごろに生きたる人に物言ふが如くありし昔をしぬび亡き魂をなぐさめ、心の誠を盡したるを亡き人たちもうけ玉ひけんかし。次に齋主玉串奉奠、これより終享の樂を奏す。次に祭主玉串奉奠。次に遺族玉串奉奠。大方は老ひませる人たちの、一人々々玉串を捧げられたるが、祭壇に齋きすねたる大さやかなる我子の寫眞をためつすがめつうちまもり、しばしは去りもねやり玉はす。かはらぬ姿をなほ世にゐますものとしも思ひ玉ふらんか哀れるを、さすがに人目にせかれて泣く音をしのび、顔うちをむけて、席につき玉ふいたはしさよ、あはれ親となり子と生まるゝほど深き哀にしはあらし。わがひざもとにねきてだに、寒きにつけ暑きにつけ、子を思ふ親の心はいかばかりぞ。まして遠き境に物學ばせて、明け暮れ、わざのならん日を祈らぬ間なき親の身のかゝる悲しみにあひてはいかでかた

むむ。思へば我にも老ひませる父母のゐますあり。人の上にてこそありけれ。そが我身の上にてありつらむには、父母はかくこそ嘆きますらめ。いでや生きませるうち一日なりとも御心をなぐさめ奉らばやなど思ひ居れば、いつしか職員惣代、生徒總代の玉串奉奠も終りてはや撤饌にうつり奉樂の聲怒むが如く訴ふるが如し。次に齋主昇神行事(盤踞二名之に従ふ)此時一同起立、此間奏樂。次に記念品贈呈にうつりしが、折しもくもりし空は雨となりてポツリ／＼と降りそめければ、急ぎ齋主以下席に復し一同退出せり。時に午前十一時。位牌及記念品を抱きて立去れる遺族の人々の姿今もなほ眼をはなれず。(陶山旭溪)

五事 後 一 東

遺骨讀經、大追悼會などありしにも係らず、猶は亡友追慕の情止み難く、各クラスにても諸種慰靈の催あり、三部三年の如きは遠く故大礎義士君の墓に詣でも、生前追懷想舊の情を慰したり。また佛教青年會に於ては、四月十四日午後三時より、遺族諸教授を招きて、特に佛式追弔會を修行せりといふ。

五月下旬、松浦校長は自身各地に赴きて、故生徒の遺族を訪問せられて、衷心の同情を披瀝せられたり。又罹病者側にては在院臥床中の厚恩を謝せんため教授諸氏を正賓として、五月廿八日生徒集會所に於て謝恩會を開きぬ。

悲 雨 涙 滴 録

●樋口甲一君 一部二年甲二。大分縣日田郡五和村の人なり二月十五日より既に不快を自覺せしも二十五日